

『夢花 (11/02)』

コチコチコチコチ
時計が時を刻む
チクタクチクタク
時計が時を刻む

私の心も刻まれて
私の夢も刻まれて

いつか花が
咲くのだろうか
いつか実が
なるのだろうか

チクタクチクタク
時が刻まれて過ぎる
コチコチコチコチ
時が刻まれて過ぎる

『朝陽 (11/13)』

朝陽を浴びて
紅葉の山々が
佇んでいる
風もない冷たい
朝の中を
太陽の光に
その色を輝かせて
なすがままにいる

小鳥はいいですね
そんな中に
いるんですから
小鳥はいいですね
そんな中で
話を出来るんですから

紅赤・赤・濃茶・黄色
青空に紅葉が
くっきりと
光っているのです

朝陽を浴びた山々は
静かさに佇み
小鳥のシンホニーを
周りに響かせて
紅葉の眩しさが
黄金白金に反射し
きらきらきらと
夢を見せている

『舞台 (11/21)』

人生と言う
舞台に私は疲れた
大向うを
唸らせることも

観客の拍手を
浴びることも
人生の道に
私は疲れた

生きるために
舞台へ上がる

生き続けるために
観客の前で
演じ続ける
私は俳優ではない
なのに生きる為
舞台上で演じ続ける

舞台を下りて
永遠の旅路へと
夢を見る
私が舞台から消えても
人生芝居は
続けられるだろう
一部の人の

涙は流れるだろうが

そこは
観客の事をも
人生の演技の事も
気にすることはない
きつと安らかなる
眠りの世界であろう

生きるための
舞台ではなくして

ひとはみな
人生の演技者
舞台上で芝居を演じ
観客に拍手を頂き
笑顔で礼を言う
それができなきや
ひとはみんな
永遠の旅路へ発つのだ

黄金白金に
染められた舞台上で
今日も演じ続けて
ひとはみな
生きているのだ
下りることなく
下りることも出来ずに
演じている

『旅 (11/21)』

旅人は町外れに現われし
そのマントはボロボロ
その鞆もボロボロ
彼は呟いた
この街は良い人のだ
私はパンにありつけると
街角に立ちて
旅人は語り始めた
幾多の町の事を
そこに住む
幾多の人々の事を
彼の奏でる音は
風に乗って町の通りを
響き渡った
幾多の町の事を
幾多の人々の安息を

誰だ！ この音楽は誰だ！
静かにしろ私は
気違いになりそうだ
犬がご主人様宜しく吠えだし
通りを歩く彼へ
石粒が飛んで
旅人の楽器にあたった

この町をとつとつと出ていけ
 犬がお前を咬みつくだろう
 お前には月の明かりと
 星の輝きが似合いだ
 お前は雨の水をすすり
 お前は森の蛙や野苺が似合いだ
 お前にやるパンは無い
 この町は貧しく
 赤ん坊にやる乳すら無いのだ

旅人は飛び石を身に受け
 犬にマントを引き裂かれ
 逃げるように町を後にした
 星空へ心を開けて
 月明かりに心を見せて
 私は旅人なのだ
 生きを見つめる旅人なのだ
 生きの安堵を語る詩人なのだ
 この暗闇に輝く星々の様に
 この暗闇を照す月の様に
 人の海原に灯し美を輝かすのだ
 あの星々のごとく
 月明かりの様に
 吟遊詩人は幾多の町を
 見知らぬ街を彷徨い歩いて
 人に語らねばならないのだ

『出会い (11/21)』

エーゲの海を
 見下す丘で
 輝く瞳が大きく
 若きジプシーは
 花束を持っていた
 その紅の唇から
 私は聞いた
 中世時代に生きた
 シルヴィウスを
 吟遊詩人を

百の心を一つに
 悲しませ
 百の人を一つに
 涙を流させ
 シルヴィウスは
 起きる事なく
 眠りについた
 今なをその石碑には
 深紅な薔薇が
 絶える事はない

エーゲの青を
 身体に浴びながら
 私は

シルヴィウスを想う
 百の心を一つにし
 百の人を一つにした
 吟遊詩人の語りを
 その温かく優しさを
 鳥の様に大空を飛んだ
 シルヴィウスを

シルヴィウスーアンリ・ボスコ(仏)
 著 天沢退二郎訳

『シルヴィウス (11/21)』

百の心を一つにし
 百の人々を一つにし
 シルヴィウスは
 今日も吟遊詩を語る
 ローソクの炎が揺らぐなか
 天幕が波打つ中
 シルヴィウスの語りは
 深く悲しく心を揺さぶり
 百の人々は涙を流す
 百の心が一つになる

外の吹雪の中
 ローソクの炎が揺らぎ
 天幕は波打ち
 吟遊詩人の語りは
 温かく優しく
 百の心を包み込み
 百の人々を懐かしい
 夢の中へと誘い込む
 百の人々は黙して
 百の心が一つになる

シルヴィウスは
 旅人なのだ
 シルヴィウスは
 吟遊詩人なのだ
 シルヴィウスの語りは
 温かく優しく懐かし
 百の心を一つにする
 力を持っている
 百の人々を一つにする
 力を持っている

『夢温もり (11/23)』

もう十一月も終わりです
 ね 銀杏の葉は黄金に透き
 紅葉の葉は燃える朱に透き
 セブリアンブルーの空へ
 ひらひらと黄金赤金が風に舞う
 私の過ぎ去りし夢よ
 飛ばないで飛ばないで
 私のかなわぬ夢よ
 行かないで私を捨てないで

.....
 落葉が風に舞い
 風に吹かれ行く
 アスファルトの上を
 朝陽を浴びて
 ひらひら.....

 ひらひら.....

止まることなく
 流れ去っている
 夢よ行かないで
 夢よ私を捨てないで
 ああ.....あ.....
 黄金の輝きが

あ.....あ.....
 燃える朱が
 陽に眩しく見せて
 風に舞い去って行く

行かないで私を捨てないで
 黄金白金の夢たちよ
 セブリアンブルーの空の中より
 私の心に宿って泊っておくれ
 銀杏並木は黄金に映えて
 紅葉は朱に燃えて
 陽にキラキラ透き輝いて
 夢よ心に宿って暖めておくれ
 もう十一月も終わるのですね

『冬の旅人 (11/23)』

旅人にとって
 冬はことさらに
 凍えるもの

吹雪の荒れ狂うなかは
衣をしつかりと
身につけて

夜空の星々が瞬く
白銀の雪原の日には
しばしを憩い

焚き火の暖炉の前では
一宿の御礼に
詩霊を弾けさせ

冬の旅人の歩きは激しいものだ

温もりを後にして
旅人は吹雪へと
歩かなければならぬ

宿りを後にして
詩霊の導くまま

旅立たねばならない

流離いと離別は
悲しみと涙は
冬の旅人の糧

憩うものは
詩霊に捧げた
旅人の御身なり

『道 (11/28)』

葉が落ちた柿の木の
赤き実が朝陽が当たり
ムク鳥がつばんでいる
冬のまだ寒き中を

路を歩きし旅人の
頭上高きところで
かの鳥が群れは叫ぶ
ギャーギャーギャーと
見知らぬものの侵入を

野畑へ森へと告げている

旅人の歩きし路は
暗き森の中へと通じ
入るものも
出てくるものも
路を通れしもの定め
憩いの一輪が路上の菊よ

冬の寒き中に
裸にされた柿の木
その赤き実をまだ落ちずに
夕日に染れし

End all 1994/11